

■ウィンド Etc. (風のエトセトラ)

～ドーデの『風車小屋便り』～

日本風力発電協会 専務理事 中村 成人

始めて見た欧州の伝統的風車

ご存知のかたもいらっしゃるかと思いますが、南仏・プロバンスにあるアヴィニョンやアルルからそう遠くない所に、フォンヴィエイユという小さな村があり、その郊外の小高い丘の上に、『ドーデの風車小屋』と呼ばれる風車が建っています。

ドーデの風車小屋



アルフォンス・ドーデは19世紀に活躍したフランスの小説家で、その代表作とされている作品『風車小屋便り』は、30の物語で構成される短編小説集です。その第7話が「アルルの女」で、後に戯曲化されビゼーの音楽とともに、日本でも多くの人たちに親しまれている通りです。

プロバンスは晴天が続く夏とともに、一転してミストラルと呼ばれる激しい風が吹く厳しい冬の気候で有名ですが、食事もワインも美味しく、複数の世界遺産を含めて歴史的な観光名所も多く、一大観光地区でもあります。フランスによる「法王捕囚」で知られるアヴィニョン、ゴッフォが苦しみながらも過ごし多くの傑作を残したアルル等々・・・。

そういう中でドーデの風車小屋は、丘の上にただ一つ立っているだけですが十分に存在感があり、異彩を放っています。この小屋は粉ひき小屋として使われていたとの説明があったと記憶しますが、ドーデも故郷の丘に建つこの小屋を見て、『風車小屋便り』の着想を得たといわれています。

私は1988年初めから4年半ほどフランスに駐在していましたが、社内報で会社が米国のカリフォルニアで大規模な風力発電事業を始めたことを知り、自分もいつか帰国した際には仲間に加わりたいたいと思ったことがきっかけとなり、家族のプロバンス旅行の強い希望もあって、アヴィニョン行の夜行列車に車とともに家族一同が乗り込み、憧れのプロバンスとドーデの風車小屋を訪れた次第です。

再び欧州の歴史的風車に会う

話は変わりますが、今年6月に協会が主催する「オランダ洋上視察ツアー」に、自分も参加させて貰いました。ほぼ2年ぶりの欧州出張であり、オランダには20年ぶりで行くことになりました。

キンデルダイクの風車群



ツアーの後半に洋上風力用の各種船舶を製造している造船所を訪問しましたが、その造船所のほぼはす向かいに位置していたのが世界遺産にもなっているキンデルダイクの風車群でした。

思えば、約25年前には「いつか自分も風力発電事業に関かわりたい」と思いつつ、ドーデの風車小屋を見学した自分が、今度は日本の洋上風力発電の実現を目指した勉強を目的にオランダを訪問した訳で、まさに隔世の感を深くするとともに、日本における洋上風力発電実現への思いを強くした次第です。